学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

保育職を目指す学生が実習中に体験する困難の内容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片岡, 祥 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32125/00000060

保育職を目指す学生が実習中に体験する困難の内容

片岡　祥

要　約

保育職を目指す学生は実習の中で様々な困難を体験する場合がある。実習中に体験する困難は学業意欲の低下や保育職者としての自信を失うなどの問題へつながることもある。そこで実習前指導の段階で実習中に起こる様々な困難を理解して対処法を獲得しておけば，実習中の困難から生じる否定的な影響を緩和できると考えられる。このことを踏まえ，本研究は保育職を目指す学生が実習中に体験する困難の内容を明らかにすることを目的とした。調査はA県内の専門学校２年生52人（女性47人，男性５人）及びB県内の短期大学２年生33人（女性26人，男性７人）を対象とした。分析の結果，「子どもへの指導」，「子どもとの関わり」，「子ども同士のトラブル」，「支援を要する子ども」，「実習生への攻撃や暴言」，「子どものケガ」，「子どもの体調不良」，「教員との関係」という８つのカテゴリーが見いだされた。これらの結果を元に，実習前指導の段階で対処法を獲得するための大学教育の実施に貢献するために必要な講義の在り方について議論がなされた。

キーワード：保育職学生，実習中の困難，実習前指導

問　題

本研究は，保育職を目指す学生が実習中に体験する困難を明らかにし，実習前指導の段階における対処法獲得の一助とするために行うものである。

保育職を目指す学生の実習状況

近年，保育所と幼稚園はその両方の特徴をあわせ持つ認定子ども園への移行が進んでいるという時代背景があり，就労の際に幼稚園教諭免許状と保育士資格の２つを取得していることが求められるようになってきた。必然的に保育職を目指す学生は幼稚園教諭免許状と保育士資格の２つの取得を希望している場合が多い。上述した２つを取得できるように教育課程を設定している学校も多く，設定していない場合は通信教育などを組み込むことで対応しているところも見られるという現状である。

２つの資格を取得するためには，必要単位数の取得だけでなく資格に対応した現場での実習を行う必要がある。幼稚園教諭免許状は幼稚園での実習が，保育士資格は保育所と児童福祉施設での実習が義務づけられている。実習期間は規定を逸脱しない範囲で学校のカリキュラムや学内事情との兼ね合いで設定されているが，幼稚園教諭の免許状取得に必要となる幼稚園での教育実習であれば４週間や３週間を１回もしくは２週間を２回行う場合が多い。また，保育士資格に必要となる実習は実習先と実習期間の設定の組み合わせが豊富であるため一例に留めるが，保育所での２週間２回の実習と児童福祉施設（例えば児童養護施設や障がい児（者）施設など）での２週間１回の実習を行う場合，保育所で２週間１回の実習と児童福祉施設で２週間２回の実習を行う場合などがある。便宜的に週単位で表記を行ったが実習の必要日数と時間に

は規定があり，実習先の運営形態や学校の方針もあるため，週に１日あるいは隔週で１日という具合に実習が行われる場合もあれば，１週目６日間２週４日間といったような実習日程になる場合もある。また，児童養護施設では泊まり込みでの実習を行う場合もある。

このように，保育職を目指す学生は複数回に渡り長時間の実習を異なる場所で行うこととなる。子どもと関わる時間についても，幼稚園であれば朝から午後２時過ぎまで，保育所であれば朝から夕方までといったように違いがある。また，関わる児童についても，幼稚園や保育所では定型発達児が多いが，障がい児者施設であれば障がいを持った児童を中心に関わることになり，児童養護施設であれば家庭環境になんらかの困難を抱えた児童と共に実習期間を過ごすことになる。

実習の中で求められる能力

保育職者を目指す学生が各種実習中に求められる能力は非常に多岐に渡る。対象児に対する適切な関わり方に加えて，乳児の抱き方・オムツの替え方・幼児食の作り方といった保育に関する技能や，ピアノ・幼児歌・絵本の読み聞かせ・手遊び・様々な製作やリトミックなどの実技，気になる子どもや困難を抱えた子どもに対する理解などが求められるものとしてあげられる。これらに加えて，問題が起こった時の対処や先生達との関係の構築など様々な場面で社会的・対人的な力が求められることになる。藤村（2010）によると，愛他性（人のために働くのが好きである，自分のことより他人のことを優先するほうである，など），共感性（人の気持ちになって喜んだり悲しんだりすることがたびたびある，つらい思いをしている人を見ると自分もつらくなる，など），論理的思考性（物事をより深く理解しようとする，慎重にものごとを考える方である，など），気働き（細やかによく気がつく方である，細やかな気配りができる，など），社交性（人と出会うと自分から挨拶する，社交的である，など），行動力（思いついたらすぐ行動するほうである，自分から進んで物事に取り組むほうである，など），養育性（きめ細かく子どもの世話ができる，子どものためならつらいことでも逃げないで努力する，など）が保育職者の適正を測定する下位因子として見いだされている。これをみると，保育職者は子どもと関わる能力に加えて，社会人としての考え方や振る舞いも必要であることがわかる。

学生が実習中に様々な失敗をしてしまうことはある意味当然のことである。なぜならば経験が浅いことに加えて，実習は正解が一様ではない人間を相手にしたものであり，基礎的な能力に加えて応用力や柔軟性が必要となってくるからである。実習が一筋縄でいかないこと自体は学生もよく理解している場合が多く，保育職を目指す学生の実習不安に関する研究では実に約８割の学生がなんらかの不安を抱えていることが報告されている（本田・櫻井，2011）。学生が抱える実習への不安内容については，適切な保育実践や活動内容を行えるかどうか，子どもとの関係や教員との関係を上手く構築できるかどうか，体調を崩さずに実習を継続できるかどうか，身だしなみなどの社会的な常識に問題がないかどうか，などがあげられており（大野木・宮川，1996；長谷部，2007；串崎・岸本，2018；本田・櫻井，2011），学生も実習に臨むにあたって様々な悩みを抱えているという現状がある。このことは実習前に強い緊張やストレスを生んでしまうこととなり，実習中の体調不良や活発な活動を阻害してしまうことにもなりかねない。

保育職を目指す学生が実習中に経験する様々な困難は，保育者としての成長の契機になる場合があるものの，その後の学習意欲の減退につながる可能性が指摘されている（谷川，2010）。すなわち，学生によっては実習での経験から保育職を諦めることにもつながる場合も想定されるのである。実習中に感じる様々な困難が成長の契機となる場合とは，おそらくはある程度活動や実践ができた上でよりよい方略があったのではないかと内省するような状態の時ではないかと考えられる。一方で，そうではない場合は子どもへの対応や保育活動の中で自分に対する無力感が生じてしまい，保育職を目指すことに対する葛藤が生じてしまうのではないかと考えられる。

目　的

これまでの議論をまとめると，多様な対象児と関わる実習の中で体験する困難は，場合によっては学生のその後の学業や進路に悪影響を及ぼす可能性が考えられる。さらに，学生は実習前の段階で様々な不安を抱えており，強い緊張やストレスから本来持っている能力を実習中に発揮できなくなってしまうかもしれない。上述した理由から，実習中に生じる困難への対処法を実習前の学生に対して指導しておくことはとても重要であると考えられる。

以上を踏まえ，本研究では保育職を目指す学生が実習中に体験する困難の内容を明らかにし，実習前指導の在り方に貢献する知見を得ることを目的とする。なお，本研究では幼稚園での教育実習及び保育園での保育実習に焦点をあてて分析を行うこととした。その理由は，教育実習及び保育実習が実習全体の半分以上の時間を占めること，卒業後の進路として認定こども園を希望する者が多いことを考慮したためであった。

また，調査は知見の一般化可能性を考慮し，二ヵ所の保育職養成校を対象に行うこととした。

方　法

調査時期と調査対象者

2018 年 11 月に A 県内の専門学校２年生 52 人（女性 47 人，男性５人）及び 2019 年 10 月に B 県内の短期大学２年生 33 人（女性 26 人，男性７人）を対象に調査を行った。なお，対象者は幼稚園教諭免許と保育士資格に必要な全ての実習を終了した学生達であった。

手続き

講義の時間を用いて，各実習中に体験した困難を記述するように教示した。

結果と考察

カテゴリーの分類

A 専門学校で得られた実習中に体験した困難に関する記述は 155，B 短期大学では 89 の記述を得た。これらのうち教育実習及び保育園実習に関する 124 の記述を分析対象とした。得られた記述に対してそれぞれの学校別に KJ 法を用いて分類していった。

まず，A 専門学校では「子どもへの指導」，「子どもとの関わり」，「子ども同士のトラブル」，「支援を要する子ども」，「実習生への攻撃や暴言」，「子どものケガ」，「子どもの体調不良」，「教員との関係」という８つのカテゴリーが見いだされた（Table１，Figure1）。

次に，B 短期大学では「子どものケガ」，「子どもの体調不良」，「教員との関係」の３つを除いた５つのカテゴリーが見いだされた（Table２，Figure2）。これら３つが見いだされなかったことについては，このような内容を実習中に体験したものが集団の中にいなかったためであろう。他のカテゴリーについては A 専門学校と同様のものが見いだされたことから，「子どもへの指導」，「子どもとの関わり」，「子ども同士のトラブル」，「支援を要する子ども」，「実習生への攻撃や暴言」の５つが実習中に体験する主要な困難の内容であり，「子どものケガ」，「子どもの体調不良」，「教員との関係」の３つについてはごくまれに体験するものであると考えられる。

２つの学校の実習中に体験する困難に関するカテゴリーの記述数をまとめたものを Table３及び Figure３に示した。以降は，全体的なカテゴリーの記述数と内容についてみていくこととする。

Table１　教育実習及び保育実習中に体験した困難のカテゴリーと記述数（A 専門学校）

	子どもへの指導	子どもとの関わり	子ども同士のトラブル	支援を要する子ども	実習生への攻撃や暴言	子どものケガ	子どもの体調不良	教員との関係	合 計
記述数	31	17	11	2	2	3	2	1	69
割 合	44.9%	24.6%	15.9%	2.9%	2.9%	4.3%	2.9%	1.4%	100%

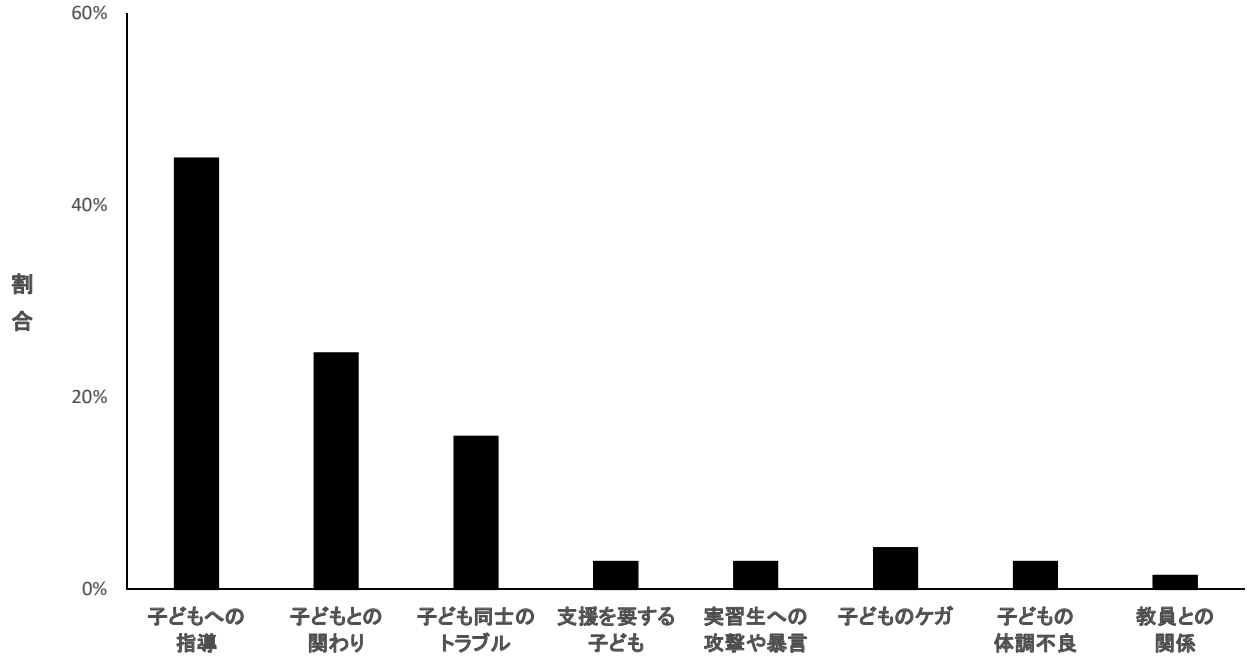

Figure１　教育実習及び保育実習中に体験した困難のカテゴリーと記述数（A 専門学校）

Table２　教育実習及び保育実習中に体験した困難のカテゴリーと記述数（B 短期学校）

	子どもへの指導	子どもとの関わり	子ども同士のトラブル	支援を要する子ども	実習生への攻撃や暴言	子どものケガ	子どもの体調不良	教員との関係	合 計
記述数	30	5	11	8	1	—	—	—	55
割 合	54.5%	9.1%	20.0%	14.5%	1.8%	—	—	—	100%

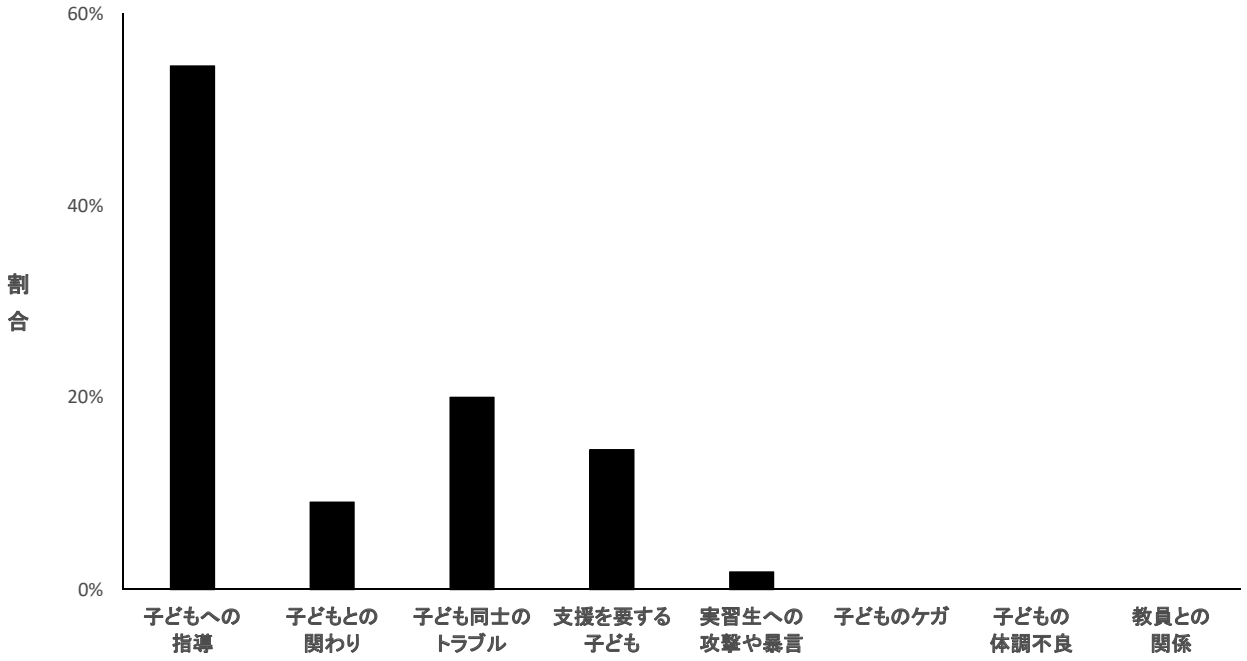

Figure２　教育実習及び保育実習中に体験した困難のカテゴリーと記述数（B 短期大学）

Table３　教育実習及び保育実習中に体験した困難のカテゴリーと記述数（全体）

	子どもへの指導	子どもとの関わり	子ども同士のトラブル	支援を要する子ども	実習生への攻撃や暴言	子どものケガ	子どもの体調不良	教員との関係	合 計
記述数	61	22	22	10	3	3	2	1	124
割 合	49.2%	17.7%	17.7%	8.1%	2.4%	2.4%	1.6%	0.8%	100%

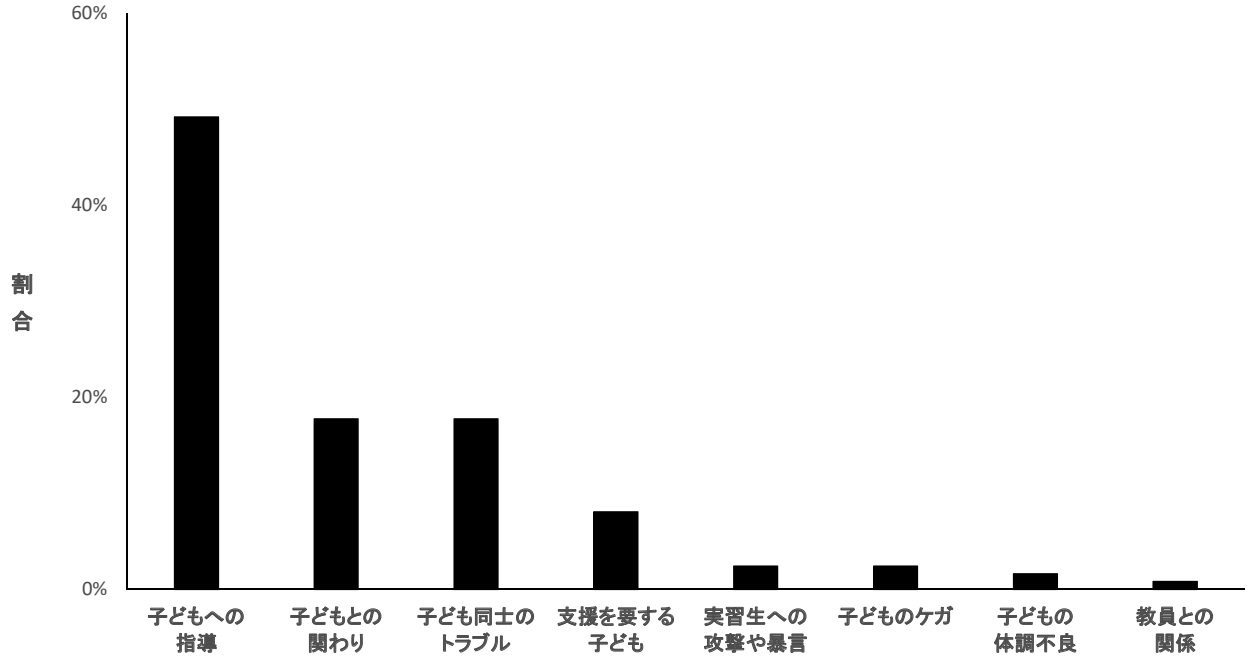

Figure３　教育実習及び保育実習中に体験した困難のカテゴリーと記述数（全体）

カテゴリーの記述数と内容

１つ目のカテゴリーは「子どもへの指導」であり，主な内容は子どもが指示に従ってくれなかった，子どもが集団活動から逸脱してしまったというものであり，記述数が最も多かった（記述数 61，全体の 49.2%）。２つ目のカテゴリーは「子どもとの関わり」であり，子どもと上手く接することができない，子どもの気持ちを汲み取ることができなかった，などの内容を指したものであった（記述数 22，全体の 17.7%）。３つ目のカテゴリーは「子ども同士のトラブル」であり，子ども同士の様々な揉め事を示したものであった（記述数 22，全体の 17.7%）。４つのカテゴリーは「支援を要する子ども」であり，発達や適応に困難を抱える子どもへの対応に関するものであった（記述数 10，全体の 8.1%）。５つ目のカテゴリーは「実習生への攻撃や暴言」であり，身体的な攻撃や様々な暴言を受けたことに関する内容であった（記述数３，全体の 2.4%）。６つ目のカテゴリーは「子どものケガ」であり，活動の中で子どもがけがをした時の対応に関するものであった（記述数３，全体の 2.4%）。７つ目のカテゴリーは「子どもの体調不良」であり，子どもの風邪や嘔吐への対処に関する記述であった（記述数２，全体の 1.6%）。８つ目は「教員との関係」であり，実習先での教員との関係構築に関する困難を表したものであった（記述数１，全体の 0.8%）。

本研究から考えられる実習中の困難の内容

実習中に体験した困難の約半分は子どもに対する教育的な指導の難しさであった。学校では子どもに対する教員としての振る舞いを学ぶために，座学に加えて教育・保育計画の立案と模擬授業・模擬保育を実践的に取り入れている大学が多いと思われる。また，他の幼児理解に関する科目においても様々なロールプレイを行い，体験的に子どもへの指導を学んだり，実際に園にお願いして指導に対する観察学習を実施したりしている場合がほとんどである。このような実習前の様々な取り組みにも関わらず，実習中に体験する困難として子どもに対する指導に関する記述が多く見いだされたことは，実習生にとって発達早期の子どもへの個別指導及び集団指導がいかに難しいものであるかを示すものであろう。

その他のカテゴリーの項目では，子どもとの関わりの難しさに関する記述が多くみられた。子どもの外界に対する認識や心のありようは大人と異なるものも多い。例えば自己中心性やアニミズムといった子ども特有の心性や，言語表現が発達過程であることなどを考慮に入れなければ子どもへの理解は達成されないと考えられる。このようなことを学校で十分に学んだ上でインターンシップやボランティアなどで子どもと関わる経験を積んでおくことで，子どもとの関わりや子ども同士のトラブルに対する対応力が身についていくことと思われる。これらのことは，カテゴリーとしても見いだされた子ども同士のトラブルに対する対処や実習生への暴言についても同様であろう。

また，支援を要する子どもとの関わりというカテゴリーについては，発達障がいや家庭環境に困難を抱えた子どもとの関わり方の難しさを指す内容であった。実習前の勉強はもちろんのこと，実習中はその子どもの生育歴や発達的な背景を把握している園の教員との連携が不可欠であろう。学生は子どもとの関わりだけではなく，園の教員との連携の在り方について事前に学ぶ必要があることがわかる。ただし，少数ではあるものの実習中の困難として園の教員との関係構築の難しさを挙げている者もいたことから，子どもだけではなく大人との人間関係の在り方についてもよく考えておくべきであることが示唆される。

最後に，突発的な子どものケガや体調不良に関する困難についてであるが，これらのカテゴリーが見いだされたことは実習生には保健や健康安全に関する知識ととっさの対応力が不可欠であることがうかがい知れる。子どものケガや体調不良は重篤な問題へと発展する可能性があるため，常に危機意識を持つ必要があるだろう。また，乳幼児突然死症候群（SIDS）や，園外活動における交通事故など子どもを取り巻く危険についてもよく理解しておくことが重要であろう。

以上をまとめると，実習中に感じる困難の大部分は子どもに関連するものであり，多方面からの子どもへの理解が大事であることが示されたといえる。

実習前指導に向けて

本研究の知見より，実習中に体験する様々な困難の約半数は子どもへの指導に関するものであった。そこで，実習前の指導としては模擬保育・模擬授業といった実践的な経験を数多く行うことが望ましいと考える。ただし，大学での模擬実践は最後まで完遂できるかどうかに焦点がある場合が多いように思われる。本研究の知見より，不測の事態や指示に従わない子どもへの対応というロールプレイを取り入れた上で模擬実践を行う方がより効果的であると考えられる。また，園外での観察参与やインターンシップ，地域のボランティアなど子どもと関わる機会を作っていくことで実習前指導の効果がより大きくなると考えられる。これは，子どもとの関わりや子ども同士のトラブル，支援を要する子どもへの関わり，実習生への攻撃や暴言，子供の体調不良といった内容についても同様であり，それぞれをテーマとしたロールプレイなどを行っていくことで実習中の対応力を高めていくことができるといえるだろう。

ロールプレイを念頭に置いた講義の実践としては，グループで具体的な場面を想定して主体的に考えて構築するような形がよいであろう。片岡（2014）では，看護学科学生を対象に臨床場面における困難と対処法について自分達で場面設定を行うロールプレイを実践している（Figure4）。このような講義実践は，事前に細かく設定が決められたロールプレイにくらべて様々な物事を考える機会に恵まれることで実習への具体的なイメージの構築につながると考えられる。また，学生の職業アイデンティティの獲得にもつながることから，将来に対する良い影響も見込まれる。このことを踏まえて，保育職を目指す学生へのロールプレイの実践としては，本研究で明らかにしたカテゴリーの提示のみを行い，自分たちで困難に関する具体的な場面を想定してどのように解決すべきかを考えるロールプレイを行うような講義が適切であると考えられる。さらに，その内容についてクラス全体で討議を行うなどして，必ずしも正解が一つではない実習中の困難への対処について深い考えを育むことができると考える。また，片岡（2014）では授業毎に学生の職業的アイデンティティの変化も検討していることから，講義が実際にどのような影響があったのを検討することもできるだろう。ただし，片岡（2014）ではロールプレイの立案から発表まで４回分の講義を使用しており，講義全体の構成の上ではそこまでの時間を取れない場合も大いにありえることである。より短い時間で高い効果が生まれるような講義立案を行うことが課題の１つであるものの，グループで具体的な場面を想定して主体的に考えて構築するロールプレイは実習前の学生にとっては重要な経験となるだろう。

まとめと今後の展望

本研究では保育職を目指す学生が実習中に体験する困難に着目し，その内容を明らかにした。このことを踏まえて学校教育を展開していくことで，実習中の困難体験から生じる可能性がある様々な悪影響を抑制することができると考えられる。

今後の展望としては，実習中の困難を想定した実習前指導の効果測定があげられる。どのような困難の内容に対しても模擬的な実践やロールプレイは効果があるのか，あるいは内容によっては別の教授法の方が効果はあるのか，という点については不明であり，教育効果を最大化するためにはこれらを検討する必要があると考えられる。

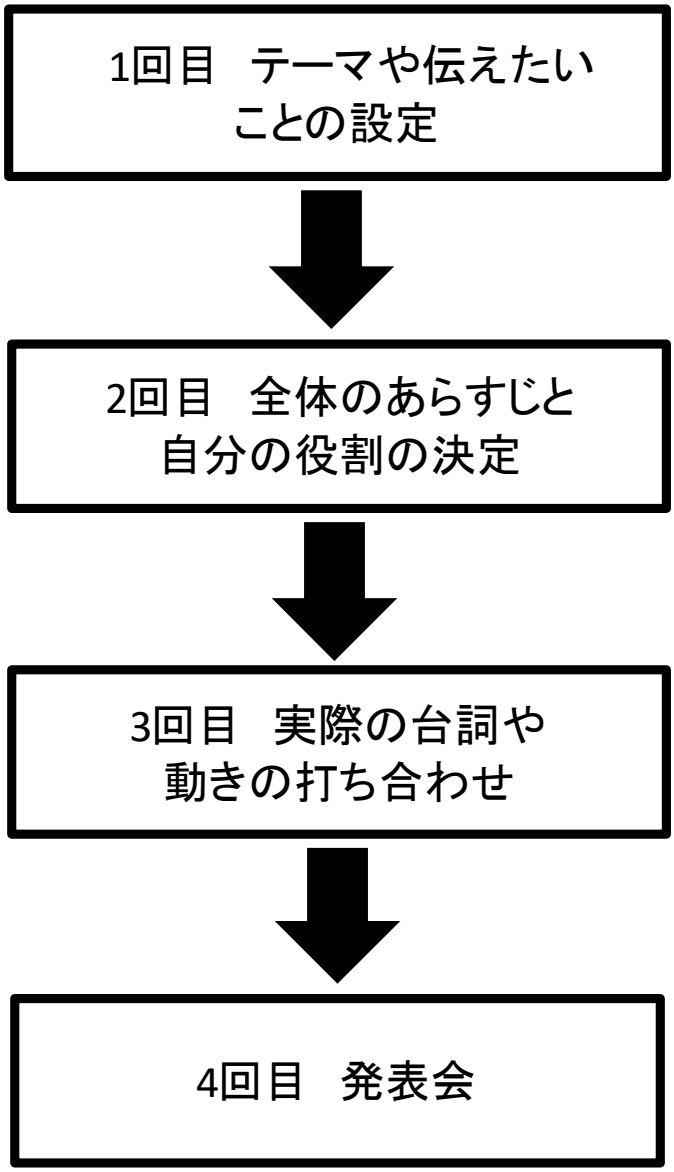

Figure４　具体的な臨床場面を想定して主体的にロールプレイを構築する講義の流れ（片岡，2014 を一部改変）

引用文献

藤村 和久（2010）．保育士,幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成　人間科学研究紀要，*9*，129―143.

長谷部 比呂美（2007）．保育実習に関する学生の意識について――実習不安を中心として――　淑徳短期大学研究紀要，*46,* 81―96.

本多 潤子・櫻井 登世子（2011）．幼稚園教育実習における実習不安の類型とその特徴 田園調布学園大学紀要，*6*，49―60.

片岡 祥（2014）．講義を用いた看護学生の職業的アイデンティティを高める取り組み――臨床場面を想定したロールプレイの効果の検討――　応用心理学研究，*40,* 56―62.

串崎 幸代・岸本 みさ子（2018）．保育実習における不安と自己効力感，レジリエンス，シャイネスとの関連　千里金蘭大学紀要，*15,* １―８．

大野木 裕明・宮川 充司（1996）．教育実習不安の構造と変化　教育心理学研究，*44,* 454―462.

谷川 夏美（2010）．幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容　保育学研究，*48,* 96―106.

片岡　祥　子ども学科講師・発達心理学・教育心理学